

令和6年度学校自己評価及び外部評価

日本大学三島高等学校・中学校

学校自己評価及び外部評価（学校関係者評価及び第三者評価）につきまして、生徒がより良い教育活動等を享受できるよう学校経営及び運営の改善と発展を目指し、本校は以下の3点を目的として実施している。

- ①本校の教育活動や学校運営について、目指すべき目標を設定し、その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について評価することにより、学校として組織的・継続的な改善を図る。
- ②学校自己評価及び保護者など学校関係者等による評価の実施とその結果の公表説明により、適切に説明責任を果たすとともに、保護者等から理解と参画を得て、学校・家庭等の連携協力による学校づくりを進める。
- ③学校評価の結果に応じて、学校に対する支援や条件整備等の改善措置を講じることにより、教育の質を保証し、その向上を図る。

方法については、平成28年3月改正「学校評価ガイドライン」（文部科学省）を参照し、具体的には「教育活動」「学校生活への配慮」「進路指導」「管理運営」の4点の評価項目に分け、取組内容について、その達成度をA～D（A:十分達成できた B:達成できた C:概ね達成できたが改善も必要 D:改善が必要）の4段階で評価している。なお、令和6年度は、以下の4点（8項目）を重点項目とした。

- 1. 教育活動
 - (1)「コース制への完全移行に伴うカリキュラム改善とキャリア教育の充実」
 - (2)「学習習慣を身につけ、学力向上に取り組む」
- 2. 学校生活への配慮
 - (1)「日常生活における生徒指導の在り方の見直し及び改善」
 - (2)「多様性をキーワードに、集団生活のルールやマナーを徹底する」
- 3. 進路指導
 - (1)「一人ひとりの目標に合わせた進路指導の実践と進学実績づくり」
 - (2)「第一希望の進路実現に向けた指導を徹底する」
- 4. 管理運営
 - (1)「生徒募集における募集定員の確保を目標とした入試広報活動の改善」
 - (2)「少子化に伴う学校経営の在り方についての検討（調査・分析）」

令和6年度取組評価

- 1. 教育活動
 - (1) 評価内容 コース制への完全移行に伴うカリキュラム改善とキャリア教育の充実

評価方法	取組評価	評価に対する意見等
自己評価	B	「総合的な探究の時間」において課題解決型学習法を実践してきたことは評価できるが、教員間の温度差や生徒全体の指導に改善が必要である。あわせて進路指導の視点に立った運用の検討が必要である。 ICT授業に関する研修を行い、改めて評価の視点に立った授業の実施の重要性を認識し、教科内で情報を共有することができた。
外部評価	B	コース制への完全移行は、生徒の多様なニーズに応え、将来社会で活躍できる人材を育成するための有効な取組だと評価できる。また、「総合的な探究の時間」は、生徒の主体性を育み、地域や企業、大学との連携など多様なプロジェクトを通して豊かな経験を積むことができるが、生徒自身がテーマを設定する難しさもある。主体性や探求心には個人差があるため、生徒の主体性だけに任せず、教員による具体的なテーマ設定のサポートなどが必要である。 コース制への完全移行に伴って生じた変化に関する具体的な説明が不足している。新カリキュラムの生徒たちは旧カリキュラムとの変化を感じられていないため、子どもからそれらを聞かされる保護者はさらに把握できず混乱している。また、それぞれのコースにおけるメリットを説明する時期をもっと早めるべきである。 学習指導要領の改訂を機にカリキュラムを見直したことは、新しい時代に対応した教育活動に取り組むことにつながり評価できる。また、「総合的な探究の時間」において、キャリア教育の目的である「自らで生き方を選択できる能力や態度を身につける」ことが実践され、その成果を校内だけでなくInstagramで発信することで生徒は達成感を抱くことができるとともに、社会との関わり方を学ぶ機会になった。

- (2) 評価内容 学習習慣を身につけ、学力向上に取り組む

評価方法	取組評価	評価に対する意見等
自己評価	B	学習習慣を身につけるため、補習の在り方を見直し、定期試験の結果に基づく成績下位者の補習を実施したり、土曜日の日課の中で自学自習の時間を設けたりするなど実践したが、積極的に補習に参加する生徒がいる一方、学習意欲に課題がある生徒が一部見受けられる。 教員の努力により自学自習ができる環境を整えているが、さらなる充実を目指し準備を進めることができた。
外部評価	B	生徒一人ひとりの学習進度や理解度に合わせた学習支援の必要性を感じる部分もあるが、中高一貫教育の6年間を通して学習習慣を確立し、大学進学を見据えた学力向上を図ることに強みがあるといえる。 定期試験結果に基づく成績下位者への補習実施という取組目標に対し、自己評価において「補習の実施」に加えて「日課の中で時間の確保をする」という+αの取組ができたことは評価できる。しかし、この補習が義務的・受動的なものとなっているため次の定期試験等に繋がっておらず不十分である。また、英語と数学で成績によってアルファクラスとベータクラスと分けているが、結局、定期試験は同じであるためベータクラスの生徒がアルファクラスに上がることができるチャンスが無くなる試験方法である。ベータクラスでしっかり理解できていることを定期試験で確認しなければ分けている意味がないのではないか。本来はアルファクラスとベータクラスのボーダーラインの生徒だけ両クラスを行き来するだけではなかったか。

- 2. 学校生活への配慮
 - (1) 評価内容 日常生活における生徒指導の在り方の見直し及び改善

評価方法	取組評価	評価に対する意見等
自己評価	B	ルールを守ることができない生徒に対し、大きな声で怒るなど適切な指導を欠く場面があり、保護者から指摘を受けたことがあった。研修を通じて、指導をするには、正しいルールに基づいた指導が大切であることを学んでいるが、改善が必要な課題である。

外部評価	B	生徒とのコミュニケーションを重視し、信頼関係を築くことに重きを置いているように見受けられた。生徒一人ひとりに寄り添った指導が行われていると評価できる。 思春期の子どもたちが多く集まっているため、言うことを聞かない状況も多くあると思われる。したがって、厳しいものの言い方は十分理解できる。当然、体罰は論外であるが、保護者からの指摘に対して教員側がしっかりと説明できる必要があり、正しく説明することで保護者も納得するはずである。 「生徒指導提要」に基づいて、生徒及び保護者の実情を鑑みた上で生徒指導を行っている。一方で、人との関わり方に慎重さが求められる現代において、熱心な教育なゆえに適切な指導を欠く場面もあったようであるため今後の改善を期待したい。
------	---	---

（２）評価内容 多様性をキーワードに、集団生活のルールやマナーを徹底する

評価方法	取組評価	評価に対する意見等
自己評価	A	挨拶をしない生徒や登校時に遅刻した生徒の対応など校則・ルール及びマナーに反する生徒に対し、実態に応じた生徒指導ができていない。 校則に関しては法的根拠に基づいたものとなっているか検討が必要である。 学期ごとのアンケートを実施するなどいじめの防止に努め適切な対応であった。
外部評価	B	不登校や適応障害になった生徒が無事に卒業できたことは、学校側の適切なサポート体制があったためであり評価できる。いじめ防止策や多様な価値観を受け入れ、生徒を指導していると感じられ評価できる。 世の中の意識として多様性は重要である。少人数制の日大三島中学校は、比較的男子と女子と分かれておらず、男女共に仲が良いことは高く評価できる。また、女子生徒にスラックスを採用したことも十分評価できる。なお、女子生徒のスカートは選択制ということであるが、学校案内等では標準セットとして組み込まれている印象があり受験生や保護者に十分な周知がなされているとはいえない。至急改善するべきである。 多様性を認めることで、それぞれが持つ違いを互いに受け入れて理解し合うことができる。その取組の一つとして、各学期にアンケートを実施している。結果として生徒一人ひとりの違いを把握した上での指導にあたることができており評価できる。また、いじめに関しても早期発見に努め適切な対応が取られている。

３．進路指導

（１）評価内容 一人ひとりの目標に合わせた進路指導の実践と進学実績づくり

評価方法	取組評価	評価に対する意見等
自己評価	A	「総合的な探究（学習）の時間」を活用し、キャリアの視点から自らの将来を考える取組ができた。 日本大学の各学部を紹介するため、説明会や個別相談を実施し好評であった。学校推薦型（付属推薦）を中心に日本大学への進学率は約６０％で例年と変わらない実績であった。 日本大学以外への大学進学を希望する生徒及び保護者を対象に大学説明会の開催や大学受験の実態を学ぶための講演会を開催するなど情報提供を行うことができた。 アカデミックコースを中心に国公立大学への進学者の割合は例年以上に高い数字を残すことができた。
外部評価	B	付属校である点を生かした日本大学への進学が強みである。また、多様な進路に対応しており、国公立大学や難関私立大学、医学部など幅広い進路に対応しており評価できる。さらに、キャリア教育も充実している。 せっかく、学生数が日本一多い大学の付属校であるため、中学生のうちからいろいろな学部に見学に行く機会を作ってほしい。中学校生活で１度だけ、日本大学の見学の機会があった。中学生は将来の目標が日々変化する年頃であるが、将来の進路を決めるのに早すぎる年齢ではない。早期に将来の目標を見定めることで、それに向けた勉強を早くから始められるため良い進学実績に繋がると考える。 将来やりたいことが決まっていない場合でも、日本大学の付属校というメリットを最大限に生かし、説明会や個別相談を実施することで情報共有し、一人ひとりの目標設定に繋がっていくのではないだろうか。

（２）評価内容 第一希望の進路実現に向けた指導を徹底する

評価方法	取組評価	評価に対する意見等
自己評価	A	個別相談や三者面談の機会を通じて本人及び保護者の希望を確認し個別指導を行うことができた。 アカデミックコースではクラスを超えて生徒一人ひとりのデータに基づきながら大学受験校の指導を行うなど個別最適化に基づく進路指導ができた。
外部評価	B	アカデミックコースには医学、歯学、獣医学、薬学を希望している生徒が毎年いるが、理科の科目選択の中で生物の扱いについて主たる選択肢となっていない点に課題がある。おそらく物理と化学が受験で点を取りやすいという点に主眼があると思われるが、医学を希望している生徒が物理に興味があるだろうか。興味のない科目を必死に勉強するよりも興味のある科目の方が自然に頭に入ってくるため勉強しやすいし、他の科目に時間を費やすこともできるかもしれない。そして、生徒の将来を考えると点数ではなく、医学系に進む生徒には生き物のことを学んでから進学してほしいと思う。生物の知識を高校生から触れられるようにカリキュラムを整備してほしい。選択するか否かは本人次第である。 多様な進路対応、高大連携、キャリア教育、コース制連携により、生徒一人ひとりの第一志望実現を強力にサポートしており評価できる。 個別相談等を通じて、本人及び保護者の第一希望を確認し、個々にあった指導を行うことができている。また、地域最大級の在籍者数を誇ることから卒業生のデータは膨大であり、個別最適化に基づく進路指導に繋がったと推測できる。

４．管理運営

（１）評価内容 生徒募集における募集定員の確保を目標とした入試広報活動の改善

評価方法	取組評価	評価に対する意見等
自己評価	B	令和６年度入学生の実態に合わせ募集定員の見直しを行った。令和７年度入試においては、昨年度を上回る入学予定者を確保できる見通しとなった。 高校の入試広報活動は公立中学校の進路指導の変化に合わせ説明会や相談会の日程を見直した結果、受験者数の増加につながる事となった。中学については静岡県内の受験者が増えたことにより入学希望者が昨年度より増えた。入試の在り方を見直しや私塾訪問以外の広報活動を検討している。
外部評価	B	少子高齢化が進む日本において募集定員を確保することは並々ならぬ活動が必要であり、Instagramを用いた広報活動は地域のみならず広い場面で活用され情報共有に寄与するため、生徒募集に重要な役割を担っている。 今後も中学生や保護者が利用する SNS を積極的に活用し、近隣や見込みエリアの中学校訪問を強化し、受験生やそのエリアの塾向けの情報提供の強化が求められる。 三島エリアでの日大三島高校の立ち位置を常に意識する必要がある。基本的に日大三島高校には希望の公立高校に合格できなかった生徒もしくは、公立高校に合格する可能性が低い生徒が単願で受験する高校であると三島地区の住民は考えている。したがって、周囲に日大三島中学校に進学したことを言うと、高校からでも入れるのになぜ中学校から日大に行くのかと疑問に思われる。さらには、もっとレベルの高い公立高校を受験できるのではないかとまで言われる。三島とはこのような意識の地区である。日大三島中学校の良さを知っている保護者は小学生から受験勉強をさせて進学させているため、子どもの教育に意識が高い保護者が多い。しかし、いざ進学させると周囲からはこのような目で見られてしまう。 学校説明会についても、内部進学の説明はあるが、実際のところ小学校６年生でこれから中学受験をさせようとしている保

		護者は日本大学を狙っていないにも関わらず、学校側は日大三島高校からは60％が日大に進学できるメリットがあると説明している。これは高校の説明会で中学校3年生の保護者にすべき内容である。静岡県は1校しか中学校を受験できないため、この説明を聞いて加藤学園の受験に流れる保護者が多いことを認識した方がいいのではないか。
--	--	--

（2）評価内容 少子化に伴う学校経営の在り方についての検討（調査・分析）

評価方法	取組評価	評価に対する意見等
自己評価	A	静岡県私学協会の会議体で示されたデータや静岡県東部地域を中心に中学校訪問を行い各地域の実情把握に努めた。少子化は従来の生徒指導や課外活動に変化をもたらしていることも判明した。 今後の本校の在り方については、中長期の視点に立った学校規模の適正を図るとともに、今後の高校や中学における生徒指導の在り方まで踏み込んだ準備が必要である。
外部評価	C	地域社会や地域企業との連携を強化するとともに、地域住民への生涯学習機会や施設の開放など、地域に根差した学校経営を行うための方向性を見出すことが求められる。 少子化に伴う人材確保は経営に大きな影響をもたらすと考える。社会的な状況を含むため自助努力だけでは対応できない面でもあるが、実情を把握し永続的な学校経営を期待する。 今後ますます少子化が進む中、日大三島中学校は1学年50人前後であり明らかに手厚い指導が受けられる（隣の三島市立三島北中学校の5分の1の生徒数）。そこをもっとアピールするべきであり、また重要なのは「高校から入ってくる600人とは全く別であると考えてください」と伝えるべきである。さらに国公立大学及び難関私立大学を狙うための6年一貫指導であると謳うべきである。しかし、もし、中学校の3年間で6年一貫教育について行けなくなった場合には日大進学という選択肢がある、と伝えることが生徒募集に効果的ではないか。加藤学園は大学の付属ではないため、勉強について行けなかった生徒を救うための受け皿がない。 日大三島中学校・高校には日大三島高校や日大出身の先生が多い。日大愛に溢れていることはいいことだが、生徒も日大を愛してしまい総合進学コースを選んでいる場合があるかもしれない。国公立大学の良さ、難関私立大学の良さを学校から子どもは聞いたことがない。日本大学は様々な学部があるため多くの選択肢がある、卒業生が多いから就職に有利というのは、実際はそうかもしれないが、生徒の募集定員確保や今後の少子化対策としては効果が薄いと考える。 現在、都心では昔は全く進学校ではなかった渋谷教育学園や世田谷学園などが大きく伸びて難関大学に多数合格させている。おそらく何か特別なテクニックがあると思うが、そのようなテクニックを募集定員の確保や少子化対策に参考にすべきではないか。

5. その他

上記の4点（8項目）以外に自由記述であげられたものを記載します。

- ・進路については、日大の内部進学に強みを持ちながらも、国公立大学や難関私立大学、医学部など、多様な進路に対応した指導をしている点が評価できる。
- ・一人ひとりの個性を尊重し、誰もが安心して過ごせる環境づくりに努めている点が評価できる。
- ・生徒とのコミュニケーションを重視し、信頼関係を構築しているが評価できる。
- ・「総合的な探究の時間」を通して地域社会や地域企業と関わることで、教科書では学べない実践的な学びができるが評価できる。
- ・日大三島の生徒は地域の人々との交流を大切にしていると感じる。例えば、桜陵祭では、「フードフェスティバル」と銘打ち、近隣の飲食店との交流が見られた。地域の店舗を知るきっかけにもなり、大変良いイベントである。また、三島市内だけではなく県内外から生徒が通学している中で、三島の民謡「農兵節」が踊られることは三島市民として嬉しく、大変感謝している。さらに三島大祭りをはじめとする様々な場面での尽力にも深く感謝申し上げる。
- ・生徒数が多いこともあり、登下校時には学校前の歩道が通行しづらいほど混雑する場面もある。片側歩行や自転車の安全対策について引き続き意識の高い指導が求められる。
- ・日大三島は地域と共に成長していく学校である信じている。先生方の尽力にも深く敬意を表し、今後ますますの発展を心より期待している。

以 上